
六月の花嫁

鼓空子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六月の花嫁

【著者名】

鼓空子

【あらすじ】

いわゆるファンタジー・エッセーである。新入社員の「ぼく」は、意に反して三人の行かず後家の居並ぶ事務所へ配属されることになる。ところが、いじめとも、しじきともいえる扱いをうけながら浮かぬ顔をして出勤する日がつづく。しかし、もともと楽天家の「ぼく」は、事務所の仕事を通して成長して行こうとこころに決める。そんなある日「ぼく」は、バスストップでひとりの美しい女性にこれを奪われることになったのである。「ぼく」は、たしかにそのひとからモーツアルトのレコードをこの手に受け取ったのだが・・・

モーツアルトのシンフォニーを『哀しみの疾走するが』と
譬えたのは小林秀雄たとだった。それが『第四十番』だけを指して云つたのか、そのすべてをか、ぼくの記憶は曖昧だ。いずれにしても、チャイコフスキーの『悲愴』がしばらくぼくの耳に張りついていたこと、含蓄のある氏のことばの意味をしばらく掘むことができるずについた。

所詮、学生時代のぼくにとつて、モーツアルトはいつもぼくの頭上を素通りしていく応用数学のようなものだったのだ。その鋭い氏の一矢が、どのようなばずみで彼のこころから引き出されたのかを知るには、いま少しの時間が必要だった。

単位ギリギリで学業を終えたぼくは、ある機械メーカーで働くことになつた。

「君はどんなところで仕事をしたいかね」と社長に問われて、いまだ左も右も眞面目まめがつかないのに「できましたら、是非とも営業部で……」。

ぼくは、なんと民主的な会社だろうと、武者震をしながら即座にそう答えた。

「うん?」社長は、まるで息子に問いただすよつて、禿げはじめたばかりの額を傾げてぼくの目を覗き込んだ。

ぼくは一瞬、氣後れしながら空かわす言つた。

「机にしばりつけられるより、動き回るほうが自分の性に合つりますから。それに・・・。」

「それに、なんだね？」。

社長の目が、艶光りするその額以上に輝いたような気がした。

ぼくはもうじどうもどろになつて、ヘビの射程に入つたカエルのようにつぎの句が継げずに硬直してしまつた。青年らしい生き生きしたところを今から売り込んでおけば、きっと後々おメガネに適うと計算していたのだ。しかし、初っ鼻から機転に欠けるところをさらけ出してしまつたんだと思うと、ぼくの頭の芯が立ちどころに火事後の赤茶けた風景に取つて変わったのを覚えた。

『ボンデ・・・・、ジーロームズ・ボンデ』のように黒いアタッシュケースを引っ提げて、社の密命を帯びたぼくは、あてがわれたわが専用車で颯爽と事務所を出る。それに、一步事務所を出てしまえばもうぼくのペースだ。何にも増して営業部は花形だ。もちろん、女子社員からも注目まと的であるはずだった。お互い何も知らない同級生たちと卒業前に申し合わせていたことを、咄嗟に想い出していたのだ。

ところが、初出勤からかぞえて二日目の朝のことだった。

ボーッと突つ立つてゐるぼくをめがけて「ちょっとアンタ、今日から営業部出荷係！」と辞令書もなしに、瘦せぎすの年増の事務員からこきなり甲高い声で伝えられた。

まったくのところ、ひどく拍子抜けしたものだ。

かりに、名刺に「出荷係」と刷られたところで、みつともなくて到底相手に配る気も起こらないではないか。いや、眞面目にそう思つた。

なんとも見栄えのしない肩書きをいただいて、やがて“007”は選りにも選つて、三人の行かず後家の真正面に座らされたことになつたのである。

業界では大手と言わっていても、資本規模の小さな同族会社だった。

この年の新入社員は四人だ。営業部に配属されたものは、ぼく一人だつた。

ライバルはいない。『是好日』と、気楽な初陣を張れるはずだつた。

ある日、行かず後家のなかでも、いちばん年若いササ嬢が入れてくれた煎茶を呑気に入れてみると、いきなりぼくの後頭部から「アンタ、なにしてんの！」と年増の一人が浴びせてきた。けたたましいその一声に、ぼくは反射的に飛び上がつた。

「お茶なんか飲んでる時間じゃないでしょ。掃除よ、ソ・ウ・ジ！」と古池に住み着いたカメのような首筋を伸ばしてぼくを威嚇してきたのは、上からかぞえて一番目の行かず後家のタケ嬢である。

「ちょっとササちゃん、わざわざお茶なんか入れんでもええのよ。自分で勝手に入れさしヨシ！」。

今度は一番年増のツキ嬢もひどい剣幕だ。向こうの厨房に隠れて

いたササ嬢のクスクス囁づ声が聞こえていた。

ところで、タケ嬢の予想だにしない叫び声にいきなり直立したも のだから、ぼくは自分の机の引き出しでしこたま下腹を打ちつけた。 その拍子に電話の受話器が吹っ飛んで湯飲みが倒れた。忽ちに、机 の上がお茶漫しになつて、湯気がもうもうと立ち昇つっていくのである。

木床に油を引いた粗末な事務所だった。

茶ガラを撒いて先輩たちが出勤する前に掃き清めておかねばならい。 "007"は、車の変わりに、ちり取りと簞をあてがわることになつたのである。

これは、ぼくひとつて予期せぬスジ書きであった。 そればかりか、世間知らずの失態が追い打ちをかけてくるにつれ、一週間もしないうちに、ぼくの眉間から「好日」の掛け軸は日を追うごとに、チビリチビリと引き裂かれていった。

手際のよいツキ嬢から荷造りの特訓を受けてもなかなかさまにならない時は、その古池の主から事務所中に響く辛辣な言葉で罵しられる始末だった。

「はやく日当に追いつかないとね、日が暮れますよ。アナタ!」。

ツキ嬢の舌先から出るそれは、まるでカミソリの刃にも勝る鋭い痛みが残つた。

日当とて萎縮していつたぼくは、電話の取り次ぎにも脂汗をかかねばならなかつた。

せいぜいが、悪友たちと交わすぐらいのマナーよりほかに持ち合わせのないこのぼくのことだ。心にもない社用語など、いきなり滑らかになれるわけがないと、アタマから納得していた。しばらくは机の上でけたたましく叫ぶ呼び鈴に、ピクピクする口がつづいた。

「早う取りよしなー」と後家どもにせつつかれ、すでにタイミングもはるかにずれてしまつて「えーっと」と立ち往生するばかりだった。

「きのうあなたに言つたわね。『毎度ありがとうございます、H機械株式会社です』。早う取つて、早う言イヨシナー！」

知恵おくれの子ではないんだ。前から、そして後ろからもこれほどまでに煽られると、簡単にできることでも、ブラックホールに吸い込まれて途方に暮れてしまうようになるものだ。

とどつまつは、出だしでつまづいたが最後、受話器を握つたまま棒立ちになつてくるぼくを見かねて、一番目の行かず後家のタケ嬢が、ぼくの手から受話器を取り上げた。

「アツ、どうもどうも、大変お待たせいたしました。ハイ、毎度ありがとうございます。ご用件のことは?」

しばらく間を置いて、「はい、『やれこめす』。

まったく手慣れたものだ。あとはおマカセだ。

食事休憩になると、食堂の控え室にあつまつっていた女どもがキヤーと騒いでいる。

たぶん、このぼくを工事で笑つているのだらうと思つた。

まだ冬のヒートが離せない初春の造り酒屋にあつては、酒搾りの
真つ只中だ。

ちょうど屋形船をひと回り小さくした『フネ』と呼ばれるヒノキ
造りの槽に、百トンもあるうかと思われる、分厚い油圧式の鉄板が
降りて搾られる。知つての通り、ぼくたちが街の市場で目にする酒
粕がその時の産物だ。子供が一人、すっぽり入つてしまいそうな厚
手の袋の中に、モロミがどつさりまじつた濁酒のような液体がドド
ドッと流し込まれる。

はち切れんばかりにデップリと膨らんだそれらは、次から次と規則
正しくフネの中に積み上げられていく。その作業が終わると、いよいよ
鐵板が音もなく静かに降りてくるのである。

もし仮に、盜み酒でもやらかしてその圧搾機の中で昼寝でもしよ
うものなら、どんなメタ、ヴォリックの太っちょでも間違いなく骨も
ろとも酒カスになる。

この作業は、酒造りの工程の中でも氣の許すことのできない作業の
一つだ。

それだけに、稼働中に故障でもすれば待つたなしの電話がかかつて
くるのである。

ある日、その電話が事務所中に鳴り響いた。

「ちよつと、アンタ、山本酒造にこのボルト届けてんか！」。

年長をほじこままに居座るこの事務所の一番田の主、タケ嬢から
命令が下った。

彼女たちの田の前に毎日置き去つたされていてはほくの息が詰ま
る。

いやまつたく、呼吸困難をきたすくらいだ。

願つてもないことと、メモ書きの地図を口へてわえたぼくは、喜び勇んで自転車に飛び乗った。

”走れ、メロスよ！“ だ。

ちよつと待て、荷物は？。

自転車のハンドルをクルッと返して振り返ると、いちばん下のサ嬢が金切り声を上げてぼくを追っかけてくるではないか。

「一モツ。これ、荷物よ！」

ササ嬢は、細い肩とあるが無しかの薄つぺらい乳房を揺らし、息を切らして走つて来たから、後のことばがすぐに出でこない。

「伝票も忘れてるやんか、アホ！」

やつとのことでそれだけのことばを吐き出した彼女の目を覗き込むと、ぼくにはほんの少しだけ緩んだように見えた。

伏見はその昔から酒造りのメッカだ。

古色蒼然とした門構えをいまだに遺しているところがあるから、しばしば時代劇のロケーションに使われることもある。

一度は明治時代の設定で、夜中に石原裕次郎のロケ隊がやつてきた。

その時はどこからそんな情報が入ってきたのか、三日も前からたいへんな騒ぎになつた。

もちろん、わが事務所の“後家ども”のアタマも顔も紅潮しつ放し

だ。

当日には、ある通りの酒屋の蔵が建ち並ぶ数百メートルはその入り口からすでに綱が張り巡らされて、歩行者どころか、犬や猫も立ち入り禁止になつた。

闇夜の向こうから恐ろしいほど強烈なサーチライトが点くと、ハンドマイクが叫んだ。

「ハーアーイ、行こう。スタートー。」

高下駄を履いた明治時代のバンカラ学生の裕次郎がゆっくりと歩いてくるシーンだ。

ぼくは立ち入り禁止の綱の中に人熱ひとねれの群衆といつしょに隔離されたようになつっていたので、彼の顔がつぶさに見えなかつた。なるほど、もともと背の高い国民的大スターには違ひない。その彼に高下駄を履かせていたから、なおのこと、ぼくの田中はこの世の者とは思えなかつた。

「もう一度いきたいんだが、いいかな！」

メガホンを口に当てた助監督の声が、照明に光る銀板の向こうから響いた。

わざかそれだけのワンカットに、どれだけの時間を掛けていたか。

さきほど『自分が隔離されていた』と言つたが、ぼくなんかはとても手が届かない世界があるんだといつ、どうしようもない淋しさを覚えたのだ。

彼らの晴れがましい世界が本物で、ぼくがいま舐めている生活は、虫ケラにも届かない虚空の領域にぶらさがつてゐる、とでも思つていたのだろうか。

莊厳な造り酒屋の門をくぐると、丸髷を結った娘がまだそこにいる。そんな、檜造りの古めかしい事務所がある。

受付の女の子に指差された方角に目をやると、薄暗い蔵の入り口に数人の蔵人が立って「早く來い。こつちだ、こつち!」と叫びながら、必死の形相で手招きをしている。

ぼくは、甘つたるい麹の香りが漂う蔵の中へ走つていった。

部品の到着を心待ちにしていた様子だ。

蔵人たちが「きた、來たぞ!」と、声を合わせて半分小躍りしながらぼくを迎えてくれた。

行かず後家たちが牛耳るあの事務所から一歩出れば、僕にとつてはそこはどこでもオアシスになるに違いないと思っていたのが本当にそうなった。

「ボウズ、一杯呑んでいけ」ということになつたのだ。

「いやあ、仕事中に、いいのかなあ」。

そう言いながら、すでにぼくの手は一人の蔵人が差し出す蛇の目のぐい飲みをつかんでいた。三口ほどで飲み干すと「もう一ついけ、そんなに早く帰ることもなかろう」とひときわ年長の杜氏が言うが早いが、なおも、圧搾機からしたたり落ちる生糀の原酒を柄杓に受け、ぼくの蛇の目の杯に注ぎ入れてくれた。

酒は飲める方だと思っていた。

「卒業祝いだ!」と言つて、あるいは「シャバに出る予行演習だ」と勝手な都合をつけて出来の悪い同窓たちと飲酒にはしゃぐことが

あつても、彼らを先に酔わせておいて見下すように観察することができた。いや、手前勝手にそう思つていたに過ぎなかつたかもしない。

「餌食になつていたのは僕のほうだつたかもしれないからだ。いずれにしても、悪友どもを介抱したことはあつても、ぼくの方から真つ先に面倒をかけることは一度もなかつたはずだ。

「そんなに早く帰ることもなからうによ」。

蔵人たちが氣前よく効き酒の蛇の口に注いでくれるのをいいことに、ひと口すすつてみた。

ふた口目はグイッと口に含んでみる。蔵人たちが舌の上でその純生をころがすようにしているのを真似てみた。

なんと美味しいもの、と思つた。

そりやそうだ、いま田の前に滴り落ちている蔵出し前の原酒を木杓に掬つてくれているのだから。

神社の名水と比較するのも可笑しいが、舌の上で転がしたときのその味の貴意の高さは、芳香からしてとても説明することが出来ない。マツタリとはこうこう舌触りのことを言つのだろう。搾りたてのそれを受けた杯をうつかりこぼしてしばりく卓上に置いておくと、酒蜜で糸底がピタッとくつ付いてくることがある。一般的の市場に『蔵出し原酒!』と謳われていても決してこのすがたで出回ることはない。

「おーいボウズ、もう一杯やつてやけ!」。

心待ちにしていたのかどうか?。多分そうだらう。

にしろ杜氏のひと声と時を同じくして、手中の杯に注がれるのを

見つめるぼくの目が、今まで以上にゆがんで輝くのを感じたからだ。

やはりそうだった。

蔵の搾り立てはアルコールの度数がひとりわ高い。

その上、空きつ腹でやつたものだからそれはすでに臨界点だった。なにも分からぬのに「マコトニイイデキバエ・・・、ヒック・・・、デス」とやらかしたからだ。

やがて後ろ髪を引かれる思いで、世間知らずのボウズは蔵人たちに別れを告げた。

ぼくは、事務所の娘たちに手を振つて自転車にまたがつた。しかし、自転車のハンドルがフラフラする。

「いい若い者が昼つぱらから」と行き会う通行人が振り返つて見ている。

自転車を降りて引いて帰ることにした。

まさにぼくの気分は『なんてつたつて青天井』だった。

「もはや地球は、ぼくのものだ。あの三人の行かず後家の前で、ビートルズの『プリーズプリーズ・ミー』だつて唄えそうだ。たぶん、そうなりやあ、彼女たちだつてあつけにとられてぼくを唄き見ることだろ?」「うう」

そんなシーンを想像した。すると、とうとう自分を抑えきれずにクククと忍び笑いを漏らしたから、傍らの通行人のひとりが、足を止めてぼくをジーッと物見するに相成った。

「遅くなつてしません。蔵人たちがどうしてもイッパイ、ヒック・・・、飲んでいけとおっしゃるものですから」。

「」は正直に報告した方が無難だ。しかし、一杯目からのことには黙っていた。

彼女たちはさうと上司に告げ口をするはずだ。

（なんとでもしてください。今となつては）

酔いにまかせて開き直りのハラができていた。

ところが、三人ともうつむいて笑つてゐるではないか。

ぼくは自分の椅子にドッカリと腰をおろして、しばらくはボーッと彼女たちを見ていた。

目の前で素知らぬ顔を装つて事務を執る彼女たちが一重にも二重にも見えてきた。

そのうちに、」ともあうつに彼女たちが、ふくよかな觀音様に見えてきたのだ。重症だ。

「部長にことわって、一階で休みよしー。」

年長の觀音様がそつとつとを合図に、事務所の中は大笑いになつた。

何も知らない新入社員は、まず、蔵の中でこのような”洗礼”を受けることになつていていたのだそうだ。

モーレツ社員が、不当な労働で過労死に追い込まれることがさほど不思議でなかつたその少し前の、比較的暢気な企業風土がまだこの国に生き残つていた時代であった。
搾り立ての”原酒”の洗礼を受けて、ぼくは、よつやく事務所のひとりになることを許されたようである。

なけなしの金を叩いても手の届かない背広を月賦で譲ることにした。

いまでは安易なカードローンで自己破産の憂き目に遭う人がいるが、割賦払いは信用の裏付けがいる。

この町に、幼いころの悪ガキ仲間だった子のオヤジが、仕立て屋を営んでいたので頼み込んだ。このオヤジは囲碁にばかり夢中になつててんで仕事に勢を出す素振りがないといつて有名だったが、腕のいい職人だとあとで知つた。

「これはなあ、ボン、とつておきのイギリス製の生地だよ、007のスーツなんかに決して引けはとらないよ」。

久々に值打ちのある仕事ができると、ぼくに巻き尺を巻き付けながらオヤジさんは笑っていた。仕事場を碁会所にするのをしげらく中止しても、出来上がりに半月は要したようだ。

気を良くして、ぼくは間をおかず、「もう一着の月賦を頼み込んだ。

「ボンは目が利くねえ。代金なんかあるとき払いの催促なしだよ。いつでもいいからね！」。

奥の方から仕立て屋の奥さんがそう言つてくれた。

ぼくは照れ笑いを浮かべて誤魔化していたが、内心は気が気でなかつたのは言うまでもない。その仕立て屋の借金を完納するのに、一年と半年はかかったのだから。

「馬子にも衣装だ。ラララララ」と使い古しの常套句に節をつけて、ぼくはネクタイを日^ひに取り替えて出勤する。そのうちに食堂の賄い婦にまでからかわれた。

なにしろ先輩たちのスーツはみんな既製品だ。椅子ズレした尻がテカ光していても、いつも決まって同じ既成スーツを羽織つてくれる。それを見るたびに、ぼくはここの中で二タニタしていた。

そのようなことがあって、ぼくの仕事ぶりも一段とはかどりを見せるようになった。少なくとも三人のうち、下一人の行かず後家が一日置くようになっていた。

いま少し明瞭ではないが、人はある程度ハッタリをかます習慣を根気よく維持することによって、いつしか思いもよらぬおまけが食らいついてくる場合があるのだ、ということが立証できたわけだ。これはやがて、出荷部から外商部へ配属されるようになつて自ら確かめることが出来た。

それでも、最年長のシキ嬢が、ある日^ひ云^い票の束をぼくの机に投げつけたかと思うと、こんなことを言つた。

「そんなんえもん着て、アンタ、何処へ行くつもりなん。こんな会社に似合わへんやんか。周りをようく見よし…」

そのあとにも彼女の言葉がつづいたが、耳に入らなかつた。

ぼくの新たな出鼻を挫くにはこれだけで十分だつた。いきなり浴びせ倒されたような気持ちに追いやられたのだ。ところが、彼女の目もとをのぞくと、笑つてゐるではないか。

ぼくはその時、ツキ嬢は、同族経営のこの事務所を暗に批判しているのかもしないと思つた。

それから数日後、そのツキ嬢が結婚するので会社を辞めるらしい
といふ噂を耳にした。

何より喜んだのはこのぼくだった。

この時期にあって、飛び上がるほどに愉快な気分を味わつたのはま
つたく人々のことだ。

ぼくにとつては、彼女が結婚できるといふそのこと事態がラクダの
針を通り抜けるより以上に、奇跡だったのだ。おそらく、当人より
もこのぼくのほうが、心の底から幸福感を噛み締めていたに違いな
い。

何しろ、樽漬けの一番重い石が魔法使いのお婆さんによつて取り
除かれたのだ。

あと一つの重石は『おねえさん』の結婚ばなし』が広まつたとき
には、すでにぼくの前では軽石に変身していた。今から思えば、彼
女たちもそれなりに、ツキ嬢の圧搾機の中で酒粕袋のようになつて
いたのかもしれない。

「結婚されるんですってね?」。

何よりも、確証を得ないと安心できな」と思つたぼくは、ある日、
製造現場の廊下でツキ嬢と鉢合わせしたときに切り出してみた。

「あつといつ間にひろがつてしまつたのね、せまい事務所のことだわ
。

なんだかいつもの彼女に似合わない落ち着いたトーンでそう言つた。

「お辞めになるんですか?」。

ぼくは、いかにも彼女がいなくなることを惜しむかのように、まったく残念至極と思われるような大袈裟な表情をつくって訊いてみた。

なにしろ、ぼくにとつてもこの先の精神的運命が左右される、最大の関心事なのだ。

「いいこと、どうか誤解しないでね。わたしが結婚するのはあなたが来る前から決まっていたの。わかるでしょう?。わたしがいなくなつた後、たつた一人だけ営業部に配属された《金のタマゴ》を、社長から『早く使えるように』って、アナタをあずかったのよ
「もう一つ、いいこと。仕事は仕事以上のものではないわ。どのようになるかはあなたの自由だけビ『これだけは他人に渡せない!』といふものを持つていてほしいわ」。

彼女はなおもつづけた。

「後に言つたわたしの言葉を忘れないでね」。

ブンブンと激しい機械音のうなる工場のなかで、よつやくそれだけ聞き取れた。

ぼくはもう黙つてうなづくよりほかはなかつた。

ツキ嬢は、人差し指を彼女の唇に押し当たかと思うと、すぐにつの指の腹をぼくの方に裏返してみせた。ぼくはどのように返答すればいいのかドギマギするばかりだった。

しかし、その後すぐに、これは多分「このことはアナタだけのこころの中に仕舞つておきなさい」という意味以上には何もない彼女

独特の仕草なのだ、と思い直すことができた。

そしてぼくは、彼女の思いがけない人差し指の印象が消えないいうちに「よかったです。June bride!」と、うなりつづける工場の機械音に負けねぐらいで叫ぶことができたのである。

ひとのほかに何を喜ばせてくれる幸福は、思いがけず予告もなしにやってくるものだ。

でも、同じように哀しみだつてそうだ。これもまた何処からか、まるで黒雲の透き間を縫つて貫きわたる雷光のよう、舌を分かち、大地を震わせながら疾走してくる。

勤め先からの帰りは、路面電車で京都駅まで乗る。そこからは、この街をかたどる碁盤の目の北端まで市バスに揺られる。もう氣を使つ必要がなくなつたツキ嬢の顔がぼくの神経から消え去るにつれて、定時で会社を後にすることが多くなつた。

それにはもう一つの理由があつた。

もし、京都駅から発車する始発の路線バスに間に合えば『あの人』が乗つている可能性があるからだつた。

いつしかそんな光景を夢見るだけで、事務所でこんがらがつてズタズタになつたぼくの自尊心を繕つてくれるようになくなつていた。

それだけに、この人に言葉をかけるなんて、ぼくにとつてはどんなに無作法ことだつた。

さりとて、じーっと見つめるなんてことも恥ずかしくて、第一に、それはとても卑しいことだとも思つた。チラッと見て彼女の残像を大切に仕舞い込んでおくだけで、ぼくはこの上なく幸せだつたのだ。

えも言われぬその人の清楚な雰囲気をどのように喻えようか。

このがさつなぼくには、近寄りがたくも、はるかにほど遠い人には違ひなかつた。

今でも、クツキリと脳裏に張り付いている。抜けるような白い肌に、ほんのわずかだが、頬に差す今にも消え入りそうな薄紅色の輝きを。

ところが迂闊にも、いつたい何処で降りているんだろうと注視しているつもりが、湯船のなかの花びらが指の間からスルリと抜け出るよう、肉欲的な欲望ばかりか、ぼくの精神そのものまでが、自分の手の及ばない異質な世界へ押しやられてしまうかのようを感じて見失つていた。

しばらくは不思議なことは思わなかつた。

しかし、ある日、この人が乗つているバスが走り出してしばらくすると、ぼくは夕闇に暮れゆく車窓に流れる街の風景に吸い込まれたように微睡まじいんでしまうことに気づいた。その時間はほんの束の間にして、一定の経過があることを実感した。そして目を開くと、彼女の姿は忽ちにぼくの視界から消えているのである。

ある日、事務所で特別に濃くしたコーヒーを胃の腑に流し込んで、今日こそは必ず彼女の降りるところを突き止めようとバスの中で身構えていた。

バカなことをしたものだ。始めのうちは緊張が助けてくれていたのだろう。気にならなかつた濃いコーヒーだったが、あいにくこの日はお目当ての彼女から外れたのかも知れないと思ったとたんに、胸がムカムカしてきた。ただ、ぼくの上気した血まみれの頭だけが一つ、バスの床に転がつてゐるようだつた。

（確率的にはいざれ適うことがあるはずだ。世間はだいたいそういうつている）

ぼくは自分にそのように言い訳せながら、わずかに首を垂れてバスの発車を待っていた。

漱石は『虞美人草』の中で美しきヒロインを、つぎのように表現している。

「波を打つ廂髪の、白い頬に接く下から、骨張らぬ細い鼻を承け、紅を寸に織る唇が・・・（略）唇をそつと滑つて、頬の末としつくり落ち合う顎が・・・（略）顎を棄ててなよやかに退いて行く咽喉が」

あるいは「丸顔に愁い少し、颯と映る襟地の中から薄薺の花が幽なる香を肌に吐いて、着けたる人の上にこぼれかかる。糸子はこんな女である」

女の美しさを表現することは、学問に縁遠いものにはまったくお手上げというところだ。だから、ぼくはファンタジー作家の手法を支持する。つまり、うんと先を急いで「彼の國の王女をまは世界一うつくしい人でした」とはじめてもいいわけだ。

それに比べれば、毎日否応なしに田にする事務所の觀音をまたちは、ぼくにとつてはすこぶる安心できるひとたちだ。

ひとりはポパイのオリーブのよつに瘦せぎすでメガネをかけていたし、もうひとりの相棒はブルータスを女にしてしまえば出来上がりだ。それに褒め上げることができるとすれば「健康そうでなによりです」。この一言で足りる。かりに、何かの拍子に歯車が狂うことがあつて、彼女たちから「お茶に」さそわれることがあつても、多分、ぼくは三枚目ままで平氣な顔をして笑わせてあげよう。

いざれにしても二人の人となりは、小悪魔も避けるほど人が良くて、ツキ嬢が結婚をしてこの事務所を去ってしまったあとも、ぼくの忠実なアシスタントとして助けてくれることになった。ぼくはそのころ、すでに車をあてがわれて外商部へ配属されていたのである。

今から思えば、この一人のイカズ後家たちは、ぼくの青春形成期の幾枚かを飾る大切な存在だつたと思う。とは言え、やはり、ぼくの青き美意識を導いてくれるにはほど遠い存在であったことは許してもらわねばならない。

梅雨の最中に偶然隣り合わせた紫陽花とも想える水玉模様の人は、すでに時を経て、今は質素な生活に甘んじてゐるこのぼくを心配するイタリアの友人が、わざわざ航空便で地場産ワインとオリーブの実を送つてくれた時の思いがけない喜びと似通つ。期待をしていないときにこそ、あり得ないことがふいに目の前に現れる。

喻えの世界が違つても、ここに遺る奥深さのレベルは同じだ。

無遠慮な人の流れに押されて梅雨時の路線バスに詰め込まれたぼくは、たとえそのひとが目に入らなくても、甘い想像に身勝手な幸せをかぶせながら、一人つり革にぶら下がつていたことが愛しく想い出される。

あきらめかけていたある日、一瞬バスが前後に揺れてわれに帰つたぼくの視界へ、偶然にその彼女が入ってきた。

ぼくが目にする時は、わずかに玉虫色に変化するワンピースか、裾広がりの青いドレス、そうでなければ初春の薄氷を手のひらにの

せればすぐにでも溶けてしまいそうな、淡黄色の縦縞のブラウスと組み合させて、ややうつむき加減に静かに座っている。

しかしこの日は、白生地に水玉模様をあしらったノースリーブの肩口から、車内灯に浮かんだパール色に輝く一の腕が、青春のぼくの目にまばゆく映った。

堀川通りのバスストップ「紫式部の墓碑」の前で降りることもわかつた。

ぼくと同じバス停で降りていたのに、トンマにもほどがあると苦笑いしたが、その笑いも何故かすぐに消えた。

恋人同士なら並んで歩けるものを、と思いながら、男らしさを装つためにわざと追い抜いて先を行く。ぼくの引っ込み思案な性格からして、もうそれだけの情報で十分だつたからだ。

男と女のはかは、雷に見舞われるがごとく『ひょっとすると、この人がわたしの生涯の伴侶になるかもしない。いや、是非ともそうでなくては困る』と、直感の無理強いのままに引きずられて間違いを犯すことがある。でも、同極の磁石が永遠に交わることがないよう、あるいはまた、あんなにこころが愛おしく弾んでいるのに、深層のずっと奥の方で執念の激流に橋渡しをしてくれる機会が見つからぬまま、いたずらな時とともに霧中に消えて行く人々もある。

ぼくの場合、理由は分からぬが、藁をもつかむ思いで必死に言葉を探してみても、沈黙のままに空しく過ぎてゆくことばかりを想像した。たとえ、吊り橋を組み立ててみたにせよ、女の手をつかんだとたんに一人はもろとも谷底の濁流に飲み込まれて行くことを直感していたのだ。

この世に等分で存在する「男と女」の引き合いと別れの姿はさま

ざまだ。

こんなわざやかなぼくの人生にも、もはや言葉にもならなくて、再び顔を合わせることがないまま去つて行かなくてはならないひと口マが設けられていることを、不憫に思う。

二人の恋愛が着かず離れず穏やかであれば、風説に耐え抜いて幸福なカップルになる確率がそれだけ高くなる。しかし、激情の中から飛び出した偏愛は悲劇を伴いやすい。それぞれに自らを聖化したナルシスの思いに酔いしれて、まことの愛の区域からはすでに逸脱しているからだ。

『なによりもまず私が愛しい』

『私は、自分のために、この愛を征服しなければならない』

悲劇の予兆はこんなところに隠れている。

世間に出てばかりのそのころのぼくは、まだ恋愛の何たるかも知らなかつたが、どんなに手を尽くしてみても、何ともならぬ世界がぼくの周りにはあるんだと言い聞かせることはすでに経験していた。にもかかわらず、それなのに、同僚の遊び人達からせつかくの『酒とバラ』の据え膳の誘いを受けても、彼らを振り切つて帰り道を急ぐ日がつづいた。

たつた一本しかないそのバスに遅れないがために。

アジサイを”紫陽花”と記すが、その名付け親は白居易であると言つ人がいる。

彼が杭州の長官であつたころ、郊外に在る招賢寺といつ山寺にひつそりと咲く名も知らぬ花を見いだして、彼は大変こころを引かれた。

白居易は、さつそくその花に「紫陽花」と名付けたと言われている。ただ『紫陽』というその言葉自体はすでに用いられていた。古来多くの神仙や求道志たちが、号として好んで使用していたのである。言わば、仙界のシンボル的な語であった。

何れの年か仙境上に植えし、

早晚か移し裁(う)えて、一凡家に到る、

人間にありと雖も人識らず、

君が与に名づけて紫陽花と作す、

(この花はいつから仙境に植えられ、いつこの寺に移し植えられたのだろう。この世に誰にも知られず、神祕な姿でたたずんでいる。あなたのために、そうだ! 『紫陽花』と呼んであげよ!) 白居易

あれは決して幻ではなかつた。

傘に繁くたたきつける雨音を抜けてぼくの耳元まで届いたその声も、肩口に染み込む雷雨の感触も、紫陽花のころになると遠く蘇つてくるのである。

その日は、明け方のどんよりした空を仰ぐと、わずかに薄日が射していたので傘を持たずに出かけた。やはり梅雨明け間近かの空である。昼過ぎから細い雨が降り出してきた。

かと思うと、のっぺりした雨雲が開いて、真夏の前の煮え切らぬ陽が事務所の窓ガラスをジリジリと照りつける。

「変な日だ、今日は」。

不快指数も限界点に達していた。

仕事を終えた帰り道でまた雨に打たれた。朝の青空にだまされてぼくは傘を持たない。

京都駅で乗り換えるバスを待っていると、密待ちの列にその人がいた。

成り行きの流れで彼女の近くに行けるかどうかを占つても、この大勢の乗客では無理だ。

それに、雨の日の路線バスは彼らの持つ傘で余計に膨れ上がる。それより、このバスに乗れるかしら？。

始発の扉が開いて、押されたり押したりでやつと乗れた。

そのひとはいつもの席に座っているはずだ。

街の灯火を打ち消すような稻妻とともに、バスの中の空氣まで切り裂くような雷鳴が走り抜ける。それは意表を突きながら、宵の街をひた走るぼくたちを射程に納めているかのようだった。

（雷は、梅雨明けの知らせだ。そう言えば今日は祇園祭の宵山なんだ）

四条のバス停で乗客の三分の一が降りた。

この思いがけない驟雨で窓も開けられずにムンムンしていた車内が幾分涼しくなったように感じた。つり革にぶら下がっていたぼくが、フツと短い息を吐いて目の前の座席に手を落とすと、一人分の空席を空けて彼女が座っていた。

（こいつの間にこんなところに…？）

彼女はもつと運転手に近い前方にいるはずだと思い込んでいたから、それ以上のことは考えなかつた。

「どうぞ」と言つ意味だらうか、彼女は、ぼくを意識したよう、元気、わざかに窓際に身体を寄してくれた。座つてよいものかどうか、しばらく躊躇つた。

『座るべきか、座らざるべきか、それが問題だ』つた。

（チャンスだチャンス、おい、チャンスだ！）。

決断した。

「シッレーリスマスー」

ぼくはとつとつと覚束ない動作を曝しながらも、彼女の隣に腰掛た。

（なんと言つことか起つているんだ！）。

ぼくの身体が、まるで天女と連れだつてはるか空中に浮いているようだつた。

これは間違いなく銀河鉄道バスだ。

もう何処にも停まらず、このまま永遠に走りつづければいいと思つた。

しかし、片方で、どこかもどかしい雨のバスがあつた。

ただ黙つて、時折稻光に浮かび上がる街と、雨の闇間に沈む街並みを交互に映しつづける窓を見つめていた。

『紫式部の墓碑』の前でバスを降りたのはぼくの方が先だつた。雨は先ほどよりも一層激しく通り道の紫陽花の葉を打ちつづけていた。

すでにもう夏の雨だ。

傘は持たない。

その人を後に走り去ると、

「あのう・・・、どうぞ、この傘へー。」

雨の音にかき消されてやつと聞こえた細い声にぼくが振り向くと、その人が小走りに近づいてきた。

「よろしければこの傘の中へお入りになりませんか?」。

彼女は、そう言いながら、真珠のよつた眩しい腕に支えたその傘をぼくの方へ差し伸べた。

ぼくは半袖の開襟シャツを着ていた。ノースリーブのその人の腕に触らないように、つとめて歩調を合わせながら歩いた。それでも、思いがけない出来事に戸惑っていたぼくの歩幅が覚束なくなると、ほんのわずかに肘が触れ合つた。

雨に濡れた二人の腕は、あたたかくもヒヤッとした。少なくとも、ぼくの腕だけはあたたかつたはずだ。驚きに満ちたぼくの脳髄が、瞬く間に狂おしいほど熱くなつていたからだ。

その時だ。熱を帯びたぼくの肘に、彼女の冷たい腕が巻きついてきた。

ぼくたちが寄り添う傘にも、傍らの大通りにも、驟雨は未だ衰えずにたたきつづけている。

雨水に稻光が吸い込まれていく路面を車が水しづきを上げて走り去つて行く。

もし、これらの共鳴音がなかつたら、ぼくは抑えがたい興奮とためらこのうちにぶつ倒れていたに違いない。なにしろ、息詰まる沈黙

のなかで、ぼくは、この先どうすればよいのかとガチガチに凍りついたようになつていたのだから。

ドッキン、ドッキンと不整に脈打つぼくの心臓の鼓動が、彼女の耳元へ届くことがないようになると、ひたすらにじこうの中で祈りつづけた。すがつたのかもしれない。

何故ぼくは咄嗟にそう祈つたのかは、今も説明ができない。

じこうもとない判断を承知の上で述べるなら、『日常ならぬ精神の平衡』を取り戻すために、ぼくたちが未だに持ち永らえている本能にすがつたのかもしれない。

「あいにくの『宵山』でしたわね。でも、四条で降りられるかもしれないと思いましたわ」。

まるで、じのぼくの首筋を包囲するかのように、柔らかい声音で彼女はそう言つた。

「以前からぼくを知つておられたようになつて聞こえましたが?」。

冷たい腕に巻かれたままだが、ぼくはしきりにそれを解きほぐす機会をつかがいながらそう言つた。

「時々、バスの中でお見かけいたしますもの。それだけではなくつてよ。あなたが、わたくしをいつも捜していくつしゃる」とも気につけておりましたわ」。

車のサーチライトに青白く浮かぶ彼女の目がキラリと光つた。その時、同時に、ぼくが彼女の腕を解き放そうとするのを阻むかのように、その全身をヌルつとした印象に変えて、なおも肘を組み直そうとした。その瞬間に、思わずぼくの手が彼女の胸に触れたかに思えた。しかし、実際には、ぼくの手にはまったく抵抗がなかつた。

彼女は、何事もなかつたようになづけた。

「すべての理由を今ここでお話することは、このわたくしには許されません。ただひとつだけお伝えできることは、あなたとお会いするのには今宵が最後になるということだけですわ」。

ぼくは立ち止まって、彼女の顔を覗き込んで言った。

「どうしてですか。せっかく、いま、たった今、息が詰まるようになつた幸福な瞬間をぼくがこの腕につかんだということに。どうか、お願ひですから、そのわけをおつしゃつてください」。

激しい雨音の響く傘の中で彼女と向き合つたぼくは、その後、たしかにこんな言葉を耳にした。

「なぜ・・・?、何故もつと早く、あなたとお遇いすることができなかつたのかしら。この世界がとても不憫で哀しく思いますわ。あなたを知つたとき、わたくしの運命はすでにある男に委ねられてしまつてたのですもの。でも、あなたの若さとわたくしでは、もともと現実的ではなかつたのね。神様がご承知だわ。わたくしは、あなたを見てすぐ閃いたの。どうしても越えてはならない世界というものがあるとおつことを。ここにきて初めてお話するのに、いきなりあなたの腕を抱えたりして・・・。わたくしも恥ずかしいことですわ。失礼な女とは、どうかそれだけはお思いにならないでね。わたくしたちの生涯で、たつた一度だけの瞬間ですもの。ねつ、そういうでしよう?」。

三つ目の分かれ道に差し掛かったとき、ようやくぼくたちの腕が解けた。それは、彼女が肩に提げていた自分のバッグから、一枚の

レコードを取り出してぼくに手渡すためだつた。

ぼくはそのレコードを受け取つた。

そして、彼女の胸元から飛び出すよつこ、勢いをつけてその傘から出た。

「あなたがおっしゃる『一度と会えない』といつ理由が、このぼくにこまひとつ分からぬいけど、ぼくは、もうそんな簡単にあるのことを忘れるわけにはいかなくなつています。何故でしょうか。ぼくはどうかしているんでしようか? いま・・・、たつた今、あなたからいただいたレコードをぼくは手に持つています。このレコードもあなたとともに、いざれぼくの前から消えてしまつのでしょうか? どうか、教えてください。抱きつこうにも、掴もうにもできないあなた。いったいこれはどうこつ意味なのでしょう。しかし、もう時間がなことおっしゃるんですね。わかつなら、なんですね! 」

ぼくは泣いていた。

少しでも雨にからなつよう、自分の胸にそのレコードを抱えて、雨中を彷徨うように走りながら泣いていた。

ほんの、わずか数分の出来事だつた。振り返つてみれば、こんなに張りつめたこころに、なんと長い時間をくれたものかと思う。そしてたしかに、そのひとが言つよつて、その宵を最後に、京都駅のバス・ストップでも、バスの中でも、今にいたるまで一度と会つることはなかつたのだ。

ただ、この他愛無い話を思つとき、ぼくのじいじはいつも辻襷のあわない謎が浮遊する。

それは、ぼくたちが雷雨に見舞われた宵山の日に別れたあのプロックの分かれ道の表通りから、嫁入り道具を満載にした《菊水幕》で

覆われたトラックが今にも発車するのを、ぼくは偶然に見ていた。
その記憶は今でも明瞭だ。

ところが、その出来事は『雷雨の傘の夜』からひと月前の、六月初旬にあつた大安の日のことだ。しかも、この日出たい出荷の日から数えて一週間後に、この荷の主人公、つまり花嫁が、湖北で浮かんだという噂を耳にした。ぼくは、この時期に、同じブラックからもう一人の花嫁が出たということは聞いていない。

数ヶ月の間、ぼくは生半可な気分ではいられない日がつづいた。すくなくとも、その間は心身ともに憔悴した。

あの女人がどのような存在であれ、ぼくの手の平にはモーツアルトのレコードが乗っている。

このことが、このぼくを今でも混乱させる。

だから、余程自分のこころが信念に満ち、厳かにならないかぎり、この人からあずかった『シンフォニー』を聞く気にはなれないでのある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889e/>

六月の花嫁

2011年1月27日04時13分発行